The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ありし日の師を偲んで
Author(s)	松本, 大
Citation	語文. 2020, 115, p. 11-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88507
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ありし日の師を偲んで

松本　大

恩師・加藤洋介先生の急逝に際し、今でも信じられず、何かの悪い冗談なのではないか、と疑う日々である。足を空にて惑うているが、ここに拙い文章を捧げ、師を悼みたいと思う。加藤先生のご業績の偉大さは私ごときが述べるまでもないため、先生との研究に関する思い出を綴ることによって、師への心よりの哀惜の意を表すことにする。

加藤先生は、滅多に学生をお褒めにならなかった。そういった基本方針があるのではないかと、よく研究室で話題にしていたことが懐かしい。ゼミの演習や古代中世の発表では、度々、

「無理でしょう。」

と、考究の甘さをご指摘なさっていた。加藤先生の教えをうけた者であれば、必ず一回はこの言葉をかけられた経験があるのではないか。一見すると容赦無いこの言葉は、その後に繰り出される先生の起死回生案を聞くと、全くその通りであると素直に受け入れられるのであった。先生のご指導は、既存の手法や視点を大胆に見直し、常に斬新な研究を目指す、という姿勢が一貫していた。時に魔術的とでもいうべき代物であった。

博士後期課程四年のある時、論文執筆に際し、『河海抄』のある注記群をどのように位置付けるか悩んでいたところ、

「そうだねぇ、現存本の成立年代が下がる、とか?」

とのご助言をいただいた。気付かないうちに先行研究を信じ込み、その枠に囚われていた私は、自分の視野の狭さを恥じるとともに、先生が既存研究に恐れも無く挑戦し、乗り越えていく姿を見、憧れを強くしたのであった。バットで殴られたようなあの一瞬の衝撃は、私は決して忘れることはないであろう。

ことあるごとに研究指導をお願いしたが、いつでも部屋に一人でいらっしゃった先生にとっては、手のかかる学生であったと思う。考証や結論が悪かった時は、困ったような顔をなされて、口数も少なく叱っていただいた。つまらなさそうに、

「まぁ、いいんじゃない。」

とおっしゃっていただいた時は、そんなことは一度ぐらいしかなかったが、劣等生のこの私はかえって不安になってしまった。振り返ると、海の物とも山の物ともつかない学生であった私を、よく指導してくださったと、本当に感謝しかない。まがりなりにも研究者になれたのは、先生あってのことである。

加藤先生との思い出で、最も印象に残っているのは、『河海抄』の諸本調査に明け暮れていた時分に、

「君は、炭鉱夫だねぇ。僕は、錬金術師の方がいいよ。」

とおっしゃったことである（先生のご名誉にかけて、職業差別を意図した発言ではないことを、申し添えておきたい）。言うまでもなく、炭鉱夫＝松本、錬金術師＝瓦井、の構図である。各地の所蔵先に調査に趣き、成果が出るかどうかも分からないまま、地道に異同を取ってくる私を評したご発言であった。かけた労力の割に得られる成果が少ないこと、そして全く華が無い研究であることを、端的にご指摘なさったのであった。言い換えるならば、もっと目立つような研究をしなければ、いつまで経っても世間に認められない（戦略的に就職のことを考えた方がいい）、ということをご指導いただいたのである。

「炭鉱に潜れば、潜っただけ成果が出るのですよ。」

と全く意に介していない私の返答に、先生は、呆れつつも、ある種お認めいただいたような、何とも言い難いお顔をなさっていた。その深意はよく分からなかったが、このご発言は、先生なりに、私を気遣っていただいた言葉だったのではないか、と思う。文献調査・諸本調査の過酷さや、評価されるまでに時間がかかることを、身を以てご認識の先生だからこそ、このようなご助言になったのだ。もっとも、先生はそのようなおつもりは無かったかもしれないし、過去の先生のご発言等からは、むしろ全く無い可能性の方が高いのだが、私はそう信じたい。その後も何度かこの喩えをおっしゃることがあったが、先生からいただいた「炭鉱夫」という称号は、私にとっては自分自身の研究手法を卑下する言葉ではなく、誇らしいものとなって胸に残っている。

過去を振り返り、今を思えば、炭鉱夫も錬金術師も立派に研究者として仕立て上げた先生は、星野仙一や落合博満のような、稀代の名選手であり、稀代の名監督であった。

私は、特段優れた学生・研究者ではなかったし、加藤先生もそのようにご覧になっていた。ただただ愚直にやってきただけである。その愚直さは、加藤先生が背中を押して下さった賜であり、先生の教え子として守り伝えるべきものと考えている。錬金術の方は妻に任せるとして、私の方は先生の学統を、「炭鉱夫」として、受け継いでいきたい。勝手に弟子と思っているが、これからもそう思い続けるために、私なりに地道に精進していこうと、決意を新たにしている。先生がご無念のうちに残されたお仕事についても、私では不十分であろうが、なんとか世に出せるよう尽力したい。それが、先生に対する僅かばかりの恩返しと考えている。

先生には、生前、十分に御礼も申し上げることが出来ず、ご学恩に報いることも出来なかった。炭鉱夫的な研究手法を、先生は

あまり褒めてはくださらないだろうし、このふざけた文章についてもお叱りになろう。まだまだお教えいただきたいことや、ご見解を伺いたいこと、ご相談に乗っていただきたいことがあった。いつの日か、またご指導いただける時に、少しはお認めいただけるように、研鑽を積みたいと思う。

加藤洋介先生、本当にありがとうございました。

（まつもと・おおき　奈良大学講師）